

आथूस: あーゆす

〈発行〉 京都文教短期大学図書館／京都市宇治市槇島町千足 80

❖❖❖❖❖❖ 『ハムレット』 へのお誘い ❖❖❖❖❖❖

前副館長・助教授 伊藤 和 男

ウィリアム・シェイクスピア (1564-1616) の悲劇『ハムレット』には実に数多くの名言がちりばめられている。読者の年齢、境遇、心境など様々な条件が変化することによりその人にとっての名言も変わってくる。学生の頃シェイクスピアの作品に初めて接した時、私にはさほどおもしろいものとは感じられなかった。しかし近ごろ年を経るにつれ、シェイクスピアの作品が私個人にとっても極めて興味ある、重要な文学作品であるという認識に到ったのである。ほんのいくつかの名言を紹介してみよう。

「ああ、ああ、退屈で、愚劣で、平凡で、無意味で、この世のいとなみがどうにもおれには我慢ができぬのだ。…ここは雑草の生い茂る庭だ、荒れはてて、浅ましい、穢らしいものばかりがはびこっている。」雑草で荒れはてた庭というイギリス的なイメージを使用しハムレットは自分自身の心境を語っているのであるが、ドラマというものはそのせりふが時空を超えて普遍性を帯び、人の心に訴えるものになるところがおもしろい。人生の実相を語る1つの名言であろうか。

「^{よこしま}邪な行いはたとえ大地が覆いかくそうとも、いつかは人の前に現われる。」このせりふも不気味な真实性を帯びて我々に迫ってくるではないか。「何かこの国によくないことがあるに相違ない。」(‘Something is rotten in the state of Denmark.’) ドラマの舞台デンマークのことを指しているのだが、果たしてそこのみとどまるだけのせりふであろうか? 「なあ、ホレーショ、この天地の間には、われわれの哲学ではどうてい考えおよばぬことがたくさんあるのだから

な。」神の前における人間存在の小ささ、その無力なることを謙虚に認める言葉とも言えよう。

「この世の関節がはずれてしまった。」(‘The time is out of joint!’) このせりふなどは、わかりやすく単純な比喩を用いて、世の中の乱れ、人の心の乱れる様を表現する名言になっていて、ここにはシェイクスピアの秩序への希求が感じられる。

「どういわけか知らんが、ぼくは近ごろ何に対しても喜びが感じられない。…変に気持が沈んで、この地球という見事な建物さえ荒涼たる岬のようにしかぼくには感じられない。…なんというすばらしい傑作だ、人間って奴は!…しかし、それがぼくにとって何だというのだ、こんな塵のかたまりが? こんなものはぼくにはちっとも面白くないよ。」人生や世界に絶望し、暗い憂愁と懐疑の世界に浸っているハムレットである。

「感情と理性とが調和して運命の神にもてあそばされる笛にならない人、運命の思いのままの音を立てないような人こそまことに幸いならだ。」シェイクスピア自身の謎めいた生涯の中で、彼が理想とした人間像の一端がうかがわれる。

「人間とは何だ? もし人間の主要な行為、一生の営みがただ寝ること、食うことでしかないとしたら、獣に過ぎん、ただそれだけだ。」実に手厳しい、辛らつな言葉である。こんな名言の数々に会うことの出来る『ハムレット』である。

(引用は筑摩書房シェイクスピア全集『ハムレット』三神勲訳より)

❖❖❖❖❖ 感性を磨く ～ゲーム脳にならないために～ ❖❖❖❖❖

教授 安本 義正 (サウンドスケープ)

最近“ゲーム脳”という言葉を目にする。これはもちろん良くない意味で使われている言葉であるが、どのような脳の状態かと言うと、コンピュータゲームに夢中になって、ゲームを長くやり続けていると、ゲームに対する集中力は高まるが、画面を直視しての作業によって、脳の後頭葉の視覚野が働き過ぎるようになり、人間本来の思考や創造をつかさどる前頭葉の働きが乏しくなるということである。その結果、理性や道徳心が働かなくなり、いわゆる“キレやすく”なるというものである。現在の子どもや若者を見ると、何か思い当たるところもあるように感じる。現代社会はコンピュータ社会でもある。コンピュータのない生活は考えられなくなっている。家庭の中にもいろいろなところにコンピュータが活用されており、便利な生活が出来るようになってきているが、一方では人と人の温もりのあるコミュニケーションの妨げになっているところがある。コンピュータ社会を生きていく中で、人間らしく生きるためには、心の豊かな人間性も兼ね備えていなければならない。言われたことしか出来ないようなロボット人間にならないためにも、日頃から人間らしさを失わないことである。人間らしさとは、まず豊かな感性を持っていることではないだろうか。視覚中心の現代社会の中で、五感をバランス良く使うことを心がける必要がある。そのようにすることで、豊かな感性が養われ、ゲーム脳にもならず、全身感覚のバランスのとれた脳の持ち主となり、キレることのない人間として生きていけるのではないだろうか。

このような例がある。ある小学校の先生が、国語の時間に、子どもたちに、「雨の音はどんな音？」という問題を、1. しんしん 2. ざあざあ 3. そよそよ の三択問題として尋ねたところ、全員が、2. ざあざあ と答えた。先生の思惑通りであった。

この先生、たまたまある障害のある子どもに、“雨はどんな音がする？”と尋ねたところ、“あっちの雨？こっちの雨？”と聞いてきたそうである。雨の音と言っても、落ちる場所で異なるのである。私たちは、雨の音を、ただ、“ざあざあ”とか“しとしと”と、何気なく表現しているが、コンクリートに落ちる雨、木の葉っぱに落ちる雨、屋根に落ちる雨、…それらは皆異なる。日常聞きなれた一つの音でも、場所によって、時間によって、風向きによって、季節によって、まったく違った音色を聞かせてくれるのである。心身の状態によっても聞こえてくる音色は異なってくる。

今私たちは繊細な感性を失っているように思われる。先入観や固定観念にとらわれてしまっているところがあり、独りよがりや思い込みもある。全身感覚（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚、意識）を総動員して、対象を観察する力を養う必要がある。観察の「観」は物事の本質を捉えるという意味があり、物事をただ表面的に捉えるのではなく、本質を捉えることが大切である。

ゲームに夢中になってゲーム脳になり“キレる”ことのないようにするために、全身感覚を総動員して、今一度身の回りの自然と対話をしてみては如何であろうか。全身感覚を研ぎ澄まして、集中して自然の声に耳を傾けることによって、真実の声が聞こえてくるようになる。そして、自分自身の内面を見つめ直すことによって、真実の目覚めに一步近づき、他者に対しても、自分自身に対しても心豊かな思いやりのある行動へとつながっていくのである。豊かな感性が養われることによって、自然界のすべてのものに、かけがいのない「いのち」を実感するようになり、人間性豊かな生き方が出来るのではないだろうか。

*** 私のすすめる3冊 ***

講師 福西 憲太郎 (人間関係論)

『あさ／朝』

谷川俊太郎 文・詩；吉村和敏 写真／アリス館

君は、あさ目覚めて何を思いますか。楽しいことを思うかもしれないし、何か憂うつになるかもしれない。君のところが色いろな表情をするとき、「朝」もまた色んな顔を見せてくれます。目の覚めるようなオレンジ、しとしと雨の銀ねず色、朝焼けの赤…。

どのようなときも、隠すことなく目いっぱい表現している朝。君のころはどうですか。未来へと開かれたところに染みわたるような朝が、君のもとに訪れますように。

『トムは真夜中の庭で』

F.ピアス 作；高杉一郎 訳／岩波書店

主人公のトム、弟が病気でおじさんのアパートで過ごすことに。眠れないある夜、一階ホールにある、家主のおばあさんの時計が、真夜中の1時に狂ったかのように13回も時を刻む。気になり階下のホールに降りたトムが、奥にあるドアを開けると、ドアの向こうは朝の庭。庭でひとりの少女と出会ったトムは、毎夜ドアの別の時間が流れる世界へ…。

真夜中にドアを介して、過去と現在が交錯するふしぎな世界の中で、トムが見つけたもの。それは、時空を超えた人と人のつながりのすばらしさではなかっただろうか。

『育てるものの日常』

津守房江 著／婦人之友社

幼い頃、どのように育てられたか、断片的に思いうかぶが、ほとんどは記憶の底に沈潜。だが記憶からこぼれ落ちた、小さな砂粒のような日常の出来事も、私の育ちには大切な意味あることであったはず。

4人の子どもを育てあげた20年間に、ふとふれた子どもの心の世界の記録。楽しいこと、悲しいこと、困ったこともそのままに表現しきっている子どもの日々の生活。そこにそっと寄りそい、応え合う母のあたたかなまなざしと関わり。忘れていた幼い頃のことが、いつの間にか、私の身体に喜びと共に生きいきと蘇ってきた。

春

トマス・ナッシュ

春が、楽しい春が、一年中の季節の王者が、やってきたのだ！
花という花が咲き、乙女たちも輪になって踊りだしたのだ。
肌を刺す寒さも去った、綺麗な鳥たちも歌いだした—
クックー、ジャグ・ジャグ、ピュ・ウィ、トゥ・ウィタ・ワー！

中 略

香りが野原にみち、デイジーの花がみんなの足に接吻している。
若い恋人たちは逢引きを楽しみ、婆さまたちは日向ぼっこだ。
通りを歩けば、あの鳥たちの美しい歌声が耳をうつ—
クックー、ジャグ・ジャグ、ピュ・ウィ、トゥ・ウィタ・ワー！
おお、春が、楽しい春がやってきたのだ！

『イギリス名詩選』(岩波書店)より

※ Nashe (1567-1601) はシェイクスピアと同じ世代の劇作家の一人。



ゼミでの参考文献を読んで思った事



食物栄養専攻2回生 安部昌子

私が2回生のゼミの時にフル活用した本である『ストレンクス&コンディショニングⅠ～理論編～』*は、スポーツ栄養を学びたいと思っていた私にとって、最適なものでした。

この本を購入したのは1回生の夏。私はスポーツ栄養士になりたくて、それに関する本が読みたくて、ある先生に相談した所、紹介されたものがこの本だったのです。パーソナルトレーナーというアメリカの運動資格に関係している本で、「これを全部理解できたらこの資格は取れる」という先生の言葉に、期待と夢が膨らみ、直ぐ本屋へと走りました。

運動中に血中乳酸濃度が安静時のレベルを越えて急激に上昇する点を乳酸作業閾値と呼び——…。実際本を広げ読んでみると、その文章が何を言っているのか、何がどうなっているのかさっぱり分かりません。実際、勉強した事のない話であったせいもありますが、初めてそれを読んだ後は、1年後、この内容を理解出来るようになるのだろうかという不安だけが残り、漠然とした焦燥感に襲われた事をよく覚えています。

それからというもの、私はその本をくじけずに読み続けてきました。やはり、内容は、いまいち理解できなかったのですが『ストレンクス&コンディショニング』の中身は、授業や個人的に運動する時に活用できるので、それも読み続けられた一因だったのです。しかし、一番の理由は、過去に感じた不安を拭い去るためと、ゼミでした。たまたまゼミの内容が、トレーニング計画を立てて実践するというものであったために、読まなければならないというせば詰った事があったのです。その甲斐があって、今迄それを読んでいて、「意味が解からない。難しい!」と思っていたものが、本当に少しずつですが、理解でき始めたのです。2回生時、もう冬を迎える時期で、文教短大へ入学して学んできた多くの知識を総動員できた事も、理解を早めた要因の一つであろうし、これを利用し、ゼミでの研究を完成させようと必死になっていた事もあるでしょう。理解し始める

と専門書といえども、面白いものだと思います。私が運動に対して興味を持っているせいもありますが、トレーニング内容によって身体づくりが変わり、また、身体をどう改善したいか——例えば、余分な体脂肪を落とし、より引き締まった身体をつくりたいなど——によって、トレーニングの内容が変わるという事が解ります。すると、「じゃあ、私はこういったトレーニングをすれば良いのか!」と、自分で自分のする事も解るようになり、楽しくなってくるのです。この感覚は、読書をし、内容を理解する事が出来たなら、誰もが得られるものではないでしょうか。

私は今回、この本を通じ、理解する事の面白さを得ました。特に、専門書に関しては一度読む程度では解からない事が多く、何度も繰り返し読む事が重要である事を学びました。最初は誰だって、内容など十分に解りません。しかし、そこで『知りたい気持ち』を放り出したら、とても勿体ないと思います。何か一冊で良い。ゼミやレポートの参考文献として出会った本の中で、自分自身の今後のためにも重宝できる内容のあるものを見付けられたら良いと思います。日常普通に出会う「物語」だけでなく、少し逸れた専門書にそのような出会いがあると、より専門的な見識が広がって、面白いし、きっと将来の糧となると思いますよ。

* NSCAジャパン編：

『ストレンクス&コンディショニングⅠ～理論編～』
(大修館書店)

